

タチチョウチンゴケ *Orthomnion dilatatum* (Mitt.) P.C.Chen

【評価理由】

チョウチンゴケ科の中でも形態的に極めて特徴のある種で、その分布も限られており、全国レベルでも絶滅危惧 I 類に選定されている。県内での既知の産地は 4 ヶ所にすぎないが、そのうちの 2 ヶ所では既に消滅している。分布上貴重な種であるため、全国レベルでの評価に準じて評価種とする。

【形態】

チョウチンゴケ科の多くの種が岩上や地上に生育し、蒴は長い蒴柄の上に傾くか下垂するものが大部分であるが、本属の種は概ね樹皮に着生し（稀に岩上）蒴柄は短く、蒴はその上に直立するという特殊な形態をもっている。

【分布の概要】

【県内の分布】

鳳来寺山の 2 ヶ所、豊田市（旧旭町）の 2 ヶ所、合計 4 ヶ所である。しかし、うち 2 ヶ所では消滅し、その後、新たな産地の追加はない。

【国内の分布】

伊豆以南の本州、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

東南アジア各地に分布する南方系の種である。

【生育地の環境／生態的特性】

県内既知の産地はいずれも自然度の高い常緑広葉樹林内の老木の樹幹である。林内湿度が高く、樹冠からの木洩れ日を利用する半陰光下に生育する種である。

【現在の生育状況／減少の要因】

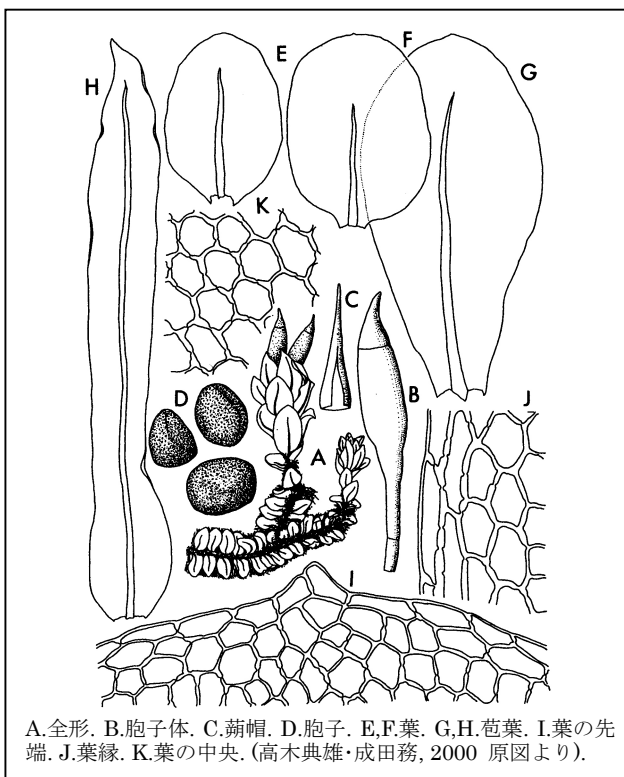
県内既知産地 4 ヶ所の内、豊田市（旧旭町）の 1 ヶ所は矢作ダムの水底に没し、鳳来寺山中の 1 ヶ所では着生樹（アラカシ）は健在であるにもかかわらず、樹幹に生育していた本種は消滅し、鳳来寺山の他の 1 ヶ所では不明である。鳳来寺山の場合は、人によって採取された形跡はないため、おそらく林内環境の乾燥化によるものと思われる。

【保全上の留意点】

樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると着生種も消滅するため、母樹の保護が重要である。また、林内環境の変化にも敏感であるため、その保全には細心の配慮が必要である。

【関連文献】

高木典雄・成田務, 2000. 姿を消したと思われる鳳来寺山蘚類の 3 種. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 29: 5-6.



A.全形. B.胞子体. C.蒴帽. D.胞子. E,F.葉. G,H.苞葉. I.葉の先端. J.葉縁. K.葉の中央. (高木典雄・成田務, 2000 原図より).

県内分布図

